■カレント巻頭言 5■

日本から何を取ったら日本ではなくなるのか

室舘（むろだて） 勲（いさお）
（株式会社 潮流社 代表取締役社長）

令和5年6月9日。天皇皇后両陛下はご成婚満30年を迎えられました。誠におめでとうございます。学生のときは、特に皇室について深く知っているわけではなく、テレビで天皇陛下を拝見する程度でした。そんな私が皇室ファンになったきっかけは、キャリアコンサルティングで開催している『しがくセミナー』の高森明勅先生の講演でした。平成19年に「世界の先頭を走る『最古の国』日本」というタイトルでお話いただきましたが、とても面白くてタメになる内容でした。世界には約２００の国と地域がありますが、国家元首が世襲によって決まる「君主国」は28カ国。残りの国は、国民のうちの一人が国家元首になる「共和国」になります。第一次世界大戦、第二次世界大戦で敗戦国となった国の王室はほとんどが倒され、共和国になりました。

共和国には共和国の良いところがもちろんありますが、伝統ある君主国は「健康」「経済的豊かさ」「自由度」「治安」の面で世界的に優れているというデータが出ているそうです。

先日、致知出版社の藤尾社長のお話を伺う機会がありました。その中で特に印象に残ったお話が「象から鼻を取ったら象ではなくなる。キリンから首を取ったらキリンではなくなる。では人間から何を取ったら人間ではなくなるでしょうか」という渡部昇一先生からお聞きしたというお話でした。藤尾社長は人間から修養を取ったら人間ではなくなるとおっしゃっており、確かにそのとおりだなと思いました。この話を聞いたときに、私はふと「日本から何を取ったら日本ではなくなるのか」という問いが浮かび、それは皇室だろうなと確信しました。

第二次世界大戦における敗戦は、皇室存続の最大の危機と言えると思います。敗

戦国の君主制はそれまでの権威も国民の支持も失って滅びるのが一般的ですが、マッカーサー元帥率いるＧＨＱは日本における皇室の重要性を非常に理解しており、皇室になにかあれば日本人は最後の1人になるまで戦い続け、多くのアメリカ兵が犠牲になってしまうと考え、皇室を認めた上で統治する選択をしました。現在日本が主権国家として成り立っているのも、天皇陛下の存在があってこそだと思います。

キャリアコンサルティングは、平成21年10月から「皇居勤労奉仕」に参加しております。昭和20年12月、戦争によって焼け野原になった東京に宮城県栗原郡から63名の若者が上京し、「皇居の掃除とがれきの片づけをさせてほしい」と申し出たのがきっかけでスタートしたのが皇居勤労奉仕です。その後、噂を聞いた人が日本中から集まり、昭和21年には1万人、昭和26年には4万人もの方が参加され、国民の力で皇居はどんどんきれいになっていきました。しかし、そこからはなかなか広まらず、参加者は徐々に減少。私が皇居勤労奉仕の存在を教えていただいた平成21年は、６０００人まで減少していました。減少の理由はさまざまありますが、平日4日間のスケジュールを確保することが難しいというのが大きなネックになっていたようです。若者を中心に、もっと国民が皇居勤労奉仕に参加するべきだと思い、社員に有給休暇を付与し「しがく奉仕団」として4日間のご奉仕を決めました。

当時、皇居でのご奉仕の際には蓮池参集所にて天皇皇后両陛下、赤坂御用地では皇太子殿下よりご会釈を賜り、緊張の中でも大変感動し、理由はわかりませんが参加した社員とともに涙を流したことを覚えています。とても素晴らしい経験をさせていただいたので、それからは年に2～3回のペースで参加し続けた結果、今ではキャリアコンサルティングの社員ほぼ全員が、皇居勤労奉仕に1度は参加した経験があるまでになりました。私も、合計20回団長として奉仕させていただきました。また、私たち社員の話を聞いて興味を持った大学生や社会人が「しがく青年奉仕団」として、これまで延べ１０００名以上、皇居勤労奉仕に参加しています。

4日間のご奉仕を終えた後には懇親会も開催していますが、社員や学生が感動のさめやらぬ中語っている姿を見ると、普通の日本人であれば、皇居勤労奉仕に参加するだけで「日本から何を取ったら日本ではなくなるのか」を肌で感じ取れると思いました。

カレント年間購読はコチラ⇩